



学び方を学ぶ

～正解がひとつではない問いに向かって～

校長 村上 裕江

梅雨あけが8月に入ってからでしたので、夏休みが終わってからやっと学校には夏が、それも、とびきりの猛暑が来た今年の夏。新型コロナウイルス感染症の予防はもう日常のことになってはいますが、感染症予防の基本である、日々の健康観察、三密を避けること、手洗いと消毒は気を引き締めて行っています。9月に入っても熱中症や台風等の心配は尽きません。子どもたちの安全を第一に、教育活動を行ってまいりますので、ご支援、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

さて、今、私たちは、新型コロナウイルス感染症の予防という「正解が今はわからない課題」と向き合いながら日常生活を営んでいます。「感染拡大防止に必要」というものもあれば、「効果がありそう」というもの、「やらないほうがいい」というもの、「〇〇すれば、やってもいい」というものなど、情報も多様で判断が困難です。その中で、状況に応じて、その時点で情報を収集し、最も良いことを見極め、決断していくしかありません。7月にお知らせしました運動会や宿泊体験学習に関する判断も、何よりも子供たちの安全を第一に考えた末でした。

昭和から平成のはじめにかけて、学校では、「正解」に向けて、いかに早く、正確に、そして汎用性をもって進めるかが課題でした。そのために、多くの知識と素早くできる技能と、正解へ進もうとする意欲と思考力、判断力が求められました。しかし、今年度から始まった新学習指導要領で求められているのは、多くの人と協働しながら、その時にふさわしい行動を創造していく粘り強さや、調整する力、その時必要な事を見つけて学んでいくとする「主体的・対話的な学びの力」です。私は、昭和から平成の時代の学習が「正解への進み方を学ぶ」だとすると、これからの学習は、「正解がひとつではない問いに向かう学び方を学ぶ」ではないかと考えています。

大人でも難しい学び方を、子どもたちとともに、授業を通して経験できることは未来を一緒に経験できる喜びです。新型コロナウイルス感染症の影響で、「対話的な学習」が制限を受けている点は残念なところですが、子どもたちと共に創造力を鍛えていきたいです。

